



命どう宝(ぬちどうたから)



毎年、6月23日は沖縄慰霊の日と言われています。3年生は広島修学旅行で平和学習を行いました。2年生は、今まさに「沖縄戦を知る」という事で唯一の地上戦となった沖縄戦について学習しています。

少しですが、沖縄慰霊の日の意味や当時、みんなと同じ世代の少年少女がどんな経験をしたのかを紹介したいと思います。

1945年の太平洋戦争のとき、沖縄で激しい地上戦(沖縄戦)がありました。その組織的な戦闘が終わり、大まかな戦いが止まったとされる日を「**沖縄慰霊の日**」と言います。この日は、戦争で亡くなった約24万人もの人たちのしのび、「二度と戦争を起こさない」と世界に向けて平和を祈る日です。沖縄県では学校や公的な機関がお休みになります。みんなも一度は聞いたことがあると思いますが、「**命どう宝(ぬちどうたから)**」という沖縄には、昔から大切にされている言葉があります。意味は、「**命こそが一番の宝物である**」という意味です。沖縄戦では、兵隊さんだけでなく、たくさんの一般の住民や、みなさんと同じくらいの中学生・高校生(ひめゆり学徒隊など)も巻き込まれ、命を落としました。みんなに知ってもらいたいことは、どんなに**国や政治の理由があっても、人間の命より大切なものは絶対にありません**。この「ぬちどうたから」の精神が、沖縄慰霊の日のもっとも根底にある強いメッセージです。当日に行われることは、6月23日の12時ちょうどに、沖縄県全域でサイレンが鳴ります。どこにいても、1分間目を閉じて静かに祈りを捧げます。そして、全戦没者追悼式(ついでとうしき)が糸満市(いとまんし)にある「平和祈念公園」で開かれます。ここでは、国籍や敵・味方に関係なく、沖縄戦で亡くなったすべての人にむけて、中学生による「平和の詩(うた)」が読まれます。このように当時、命を落とした先輩たちの分まで、いま生きている私たちが「**命を大切に、平和な世界をつくっていくこと**」を誓うのが沖縄慰霊の日です。

当時の男の子たちの任務は鉄血勤皇隊と通信隊で、男子生徒は、**日本で初めて「中学生の兵士**」として正式に軍隊に組み込まれ、軍服を着てとても危険な任務につきました。鉄血勤皇隊(てつけつきんのうたい)は、主に16~19歳の上級生。仕事は、陣地を作るための穴掘り、重い弾薬や食べ物の運搬、壊れた橋の修理などでした。

戦いが激しくなると、武器を持たされて最前線で戦わされたり、中には爆弾を背負って敵の戦車に体当たりするよう命じられた生徒もいました。通信隊(つうしんたい)は、主に14~15歳の下級生(いまの中学2・3年生と同じ年齢)で、仕事は、爆撃で切れてしまった電話線の修理、命令を伝える「伝令(でんれい)」などを行っていました。敵の激しい大砲の雨が降る中、外を走ってメッセージを届けに行かなければならず、多くの少年がその途中で犠牲になりました。

女の子たちの任務は、看護学徒隊と言って、一番有名な「ひめゆり学徒隊」をはじめ、いくつかの部隊に分かれて地下の暗いガマ(自然の洞窟)にある陸軍病院などで働きました。15~19歳の女子生徒です。仕事内容は、負傷した兵隊さんの看護、ごはん作り、水くみ、亡くなった人の埋葬などを行っていました。薬も包帯も足りないドロドロの洞窟の中で、血や泥にまみれながら、不眠不休で一生懸命に働きました。電気がなく真っ暗な中、アメリカ軍の攻撃に怯えながらの活動でした。

なぜ、子どもたちが戦場へ行ったのか? それは、当時は「**お国のために命を捧げて戦うのが正しいこと**」と学校で教えられていた時代でした。そのため、**少年少女たちは「大好きな家族や故郷を守りたい」という一心で、疑問を持たずに一生懸命がんばった**のです。しかし、戦争の終わりごろに軍隊から「解散命令」が出されると、守ってくれるはずの兵隊さんは自分たちだけで逃げてしまい、子どもたちは戦場に放り出されました。逃げ場所をなくし、多くの学徒が命を落とす結果となりました。みなさんと同じ年齢の先輩たちが、勉強も部活動も奪われ、未来の夢を叶えられないまま亡くなった歴史があるからこそ、沖縄では「ぬちどうたから(命こそ宝)」という言葉が今も強く叫ばれ続けています。こんな悲惨な歴史を繰り返さないためにも、みんなには戦争を許さない心を持ち続けてほしいと願っています。そして、平和で安心な世界をつくっていくために、改めて「**正しく人を認める文化**」をこれからも築いていきましょう。